

4月28日「エマオへの道」黙示録19：6～9、ルカ福音書24：13～35

今から2000年前、イエス様が復活されたその日、二人の弟子がエルサレムから60スタディオン（約11キロ）離れたエマオという村に向かって歩いていました。彼らの足取りは重く、心も沈んでいました。愛するイエス様が亡くなってしまったからです。

「19節 イエスは神と民全体の前で、行いにも言葉にも力ある預言者でした。21節 わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。」彼らは心からイエス様を信じていたのです。そんなイエス様が同胞のユダヤ人たちから憎まれ十字架につけられてしまった。彼らは失望していました。イエス様を助けられなかった自分たちの無力さを呪っていたかもしれません。イエス様を放って逃げ出してしまった自分たちを恥じていたかもしれません。とにかく、もうすべてを諦めて、故郷に帰る途中だったのです。そんな二人の弟子たちに一緒に歩いてくれる人が現われました。彼は何か不思議な人で、うわさ話にうといのか、この数日エルサレムで起きた出来事を全く知らない様子でした。彼らはこの数日の出来事を話して聞かせます。祭司長、議員達の策略によって罪の無いイエス様が十字架につけられたことを。その男性は熱心に二人の話に耳を傾けてくれました。

あんまり男性が話を良く聞いてくれるので、二人はついにあのことについても教えてあげることになりました。「ところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、遺体を見つけずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。仲間の者が何人か墓へ行ってみたのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」2人はどんな反応を期待したのでしょうか？「死人が復活した！？ホントばかばかしいよね！」そう同意してくれると思ったのでしょうかね。ところが、これまで話に頷いてくれるばかりだった男性が驚くようなことを語り始めたのです。「ああ、なんて物わかりが悪く、心が鈍いんだ！メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったではないか！？」そう言って、旧約聖書全体からイエス様について預言されている言葉を教えてください。失望し、どん底にあった2人の心には不思議と熱い何かがかみ上げてきました。けれども、彼らはその男性が誰だかまだ気がつきませんでした。

さあ、一行は目指していたエマオ村に辿りつきました。不思議な男性は先へ急ごうとしています。でも二人はもっと話を聞きたいと思います。無理に引き止めました。「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」そうして、宿と一緒に入りました。少しして、食事の時間になりました。三人が一緒に食事の席に着いた時、男性はおもむろにパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いて渡さ

れました！その時、二人はようやく思い出したのです。湖のほとりで5000人もの人達と一緒にパンを分け合ったときのことを！十字架につけられる前の夜にパンと杯を分け合ったことを！そうです！この人こそ、復活されたイエス様だったのです！そして気付いた途端、二人にはその男性は見えなくなってしまいました。

二人の弟子がエマオへの旅に出たのは復活の出来事が起きた日でした。彼らは、女性の弟子たちが空っぽの墓を見つけたことを知っていました。一番信頼のおけるペトロも確認したと知っていました。それでも彼らはエルサレムを離れ、エマオへと向かったのです。何故でしょう。もちろん信じられなかったからです。「死人が復活する！？そんなことありえない！」「もうイエス様はいなくなりました。何をしたって無駄だよ」「ようやく悲しみにも区切りをつけて、故郷へ帰る決心をしたのに、今さら騒ぐのは辞めてほしいよ」・・・私たちは時に諦めます。心に蓋をして、ヘタの希望を持たないようにします。そうやって自分自身を守るためです。誰しも、子どもの頃は夢があったと思います。でもある時、誰かに言われるのです。「そんなバカげたこと無理だよ。現実には厳しいよ。」なんて恥ずかしいんだ！そう思います、そして段々と夢を語らなくなります。希望を持たなくなります。心に蓋をしていくのです。その蓋の重いこと・・・これを開けるのは至難の業です。ところが、この重い蓋をあけてくれる方がいます。復活の日、重い墓石は転がされ、どかされていたのです！同じように、心に重い蓋をして、諦めていた二人の弟子はイエス様によってその蓋をこじ開けられました！もう一度、希望を持てるようになりました！暗闇で覆われていた心が愛の聖霊でいっぱいになったのです！二人は語り合ったのです。「**道で話しておられるとき、また聖書を説明してください**」

さあ、再び心が満たされた弟子たちのとった行動は何だったのでしょうか？「時を移さず」つまり「すぐに」エルサレムに戻ることです。彼らは今からご飯を食べるところでした。お腹はペコペコだったでしょう。もう日も暮れていました。盗賊や野生動物が出る危険な時間帯です。それでも彼らは動き出さずにはおれなかったのです。11キロも離れたエルサレムに、走って帰っていったのです。

イザヤ書52：7にこんな言葉があります。「**いかに美しいことか／山々を歩き巡り、良い知らせを伝える者の足は。彼は平和を告げ、恵みの良い知らせを伝え／救いを告げ／あなたの神は王となられた、と／シオンに向かって呼ばわる**」この物語にぴったりだと思うのです。イエス様が復活された。イエス様は本当に救い主だった！二人はエルサレムに残る弟子たちに伝えたくなくなったのです。行きの重苦しく失意に沈んだ足取りとは全く違います。飛び跳ね、明るいものでした。彼らの足は汗でベタベタ、土埃でドロドロ

ロだったでしょう。でも本当に美しい足でした。喜びで満ち溢れた足でした。

2011年、東日本大震災の後、すぐに、日本キリスト教団東北教区は被災者を支援するための拠点を立ち上げました。地域のために行動を起こしたい若者たち、地域の教会の牧師たちが中心となって立ち上げた支援センターは「エマオ」と名付けられました。もちろん、今日の聖書の物語から取られたものです。このセンターは被災された人達と、被災地のために働きたいという思いを持った人達を繋ぐ働きをしました。専従のスタッフが、地域の人たちと丁寧に関わりながら、ニーズを聞き取ります。そして全国各地から集まったボランティアの人たち（クリスチャンとは限らない）をニーズのある場所へと派遣していくのです。ボランティアの人たちのために仙台地区の教会は、泊まる場所を提供し、食事の用意を毎日交代で担当しました。地域の教会ですので、当然、自分たちも被災者であるのにです。本当に大変な働きを続けて来られたことにただただ尊敬の思いです。2011年から8年間続けられ、陳べ9000人以上のボランティアが関わってきたエマオの働きは今年の3月で閉じられました。

私も2012年に一週間ほど滞在してボランティアをしましたが、エマオはとても不思議な空間でした。まず色んな働きがあります。被災された方の心のケアのために話を聞くこともあれば、高齢の方の避難先で雪かきを手伝うこともあれば、津波で泥をかぶった家具の洗浄にも行きました。そういったボランティア先では時に被災者の方の生の声を聞くことがあります。家や友人を失った人達がたんと話される被災体験に胸が張り裂けそうになることもありました。ですから、エマオでは大事にしていることが2つありました。1つはスローワーク。絶対に無理をしないこと。ゆっくりと時間をかけて被災者に寄り添います。もう1つはボランティア同士のシェアリング（思いの分かち合い）。ボランティアの人たちもあまりの現実にショックを受けます。打ち明けられた体験をどう受け取れば良いのか悩みます。一人で抱えるにはあまりにも重すぎる現実を皆で分かち合い、支え合うのです。エマオには本当に不思議なことに「リピーター」がたくさんいました。皆、ここで何か優しいもの、温かいもの、日常では得られない胸が熱くなるものに触れるのです。それがまた欲しくて何度もやってくるリピーターが大勢いました。私の友人で震災当時、東北大学の学生だった彼は、このエマオでの体験を通じて牧師となることを決め、今は東北教区で伝道師として働いています。

私はこの被災者支援センターをよくぞ「エマオ」と名付けたなと思いました。そこにはもちろん被災地の復活への道という願いが込められていたことでしょう。けれども、そこは本当にエマオへの道でした。そこは私たちの心にのせられている重い墓石が取りのけられる場所でした。誰かと助け合いたい、誰かの役に立ちたい、誰かと支え合っ

生きていきたい。私たちが普段抱えていても心に蓋をして打ち明けられない「愛」がここでは素直に出せるからです。そこはイエス様が共に歩んでくださる道だったのです。

先日、愛光保育園の今後を考えるためにある方に話を伺ってきました。保育園の業界は過渡期を迎えています。子どもの数は減り、新制度が始まっています。園舎も老朽化が進んできましたから、経営上難しい判断が迫られています。私も頭を悩ませながら、その話し合いの場に臨みました。けれども、そこで言われたことはとても意外なことでした。「一番大切なのは教会がどのようなビジョンを持つかだ！」といわれたのです。私は、目が開かれるような思いがしました！ この話し合いに行くまで、私の心には色々な不安がありました。「行政は動いてくれるだろうか？」「財政面は大丈夫か？」「周囲の理解は得られるだろうか？」でも、そうなんです！大切なのは私たちが夢を語れるか！なのです。理想を明確に示せるかなのです！それさえはっきりすれば後のことは必ず何とかなるのです。

私たちは色々な現実を前に、心に蓋をしがちです。本当はこうありたいと思っても、夢や理想を口にする事さえ憚られることがあります。ついつい現実を分かっているお利口さんになりたくなります。でも本当に大切なことは、理想を語る事なのです。夢を持つ事なのです。心に蓋をして諦めることではありません。イエス・キリストは諦めて帰ろうとする弟子たちに言われます。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち！！」キリストは決して甘くはありません。だってキリストが言われたことは「諦めなさい、そうすれば楽になる」ではなかったからです。何て言われたのでしたか？「求めなさい！そうすれば与えられる！」です。そしてもう一度、神の国を語りました。平和の実現を語りました。愛を語りました。どれも夢物語です。理想論です。現実の前に簡単に敗れ去りそうです。でも、そうではなかった。イエス・キリストはお利口さんではなかったのです。重い蓋をこじ開ける方だったのです！復活なさったのです。

私たちキリストの弟子です。一体何に従っていくのでしょうか？この世の現実でしょうか？お利口さんのふりをして傷つかないように自分を守るのでしょうか？いいえ、復活のイエス・キリストに従っていきたくないと願います。現実には押し潰されずに歩みたいと思います。理想を力強く語りたくと思います。皆さんの心が愛の聖霊で満たされますように！復活の希望で溢れますように。私たちの歩む道がエマオへの道のりとなりますように！「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか！」